

F-3

事態関係の典型性と事態関係の客体化について
—テ形接続に見られる「逆接」の意味に着目して—
松浦 幸祐(大阪大学 言語文化研究科 博士前期課程)
kosukematsuura1221@gmail.com

1. はじめに

本発表の目的: ①テ形接続構文に見られる「逆接」の意味について、認知文法の観点から以下の主張を行い、②テ形接続構文のスキーマを提案する。

主張: テ形接続構文に見られる「逆接」の意味は、テ形そのものに還元されるのではなく、言語に示される事態関係と言語主体の持つ百科事典的知識との認知的不調和によって生じるものである。

2. 先行研究とその問題点

用法網羅的アプローチ(日本語記述文法研究会 2008, 仁田 1995)

先行研究の問題点: 「逆接」をテ形の他の用法(e.g. 「継起」「付帯」)と区別してはいるものの、実際にはそれぞれどちらにも解釈され得る例がある。

テ形接続構文から解釈できる個別の意味を「用法」として離散的¹に設定することに起因する。

用法網羅的アプローチでは、テ形に(1)のように「逆接」の用法があるとする²

(1) a. あんな事故にあっ**て**助かったのですか。本当に運がいい人だ。

(日本語記述文法研究会 2008: 163)

b. 悪事を見**て**見ぬふりするの、卑怯なことだ。

(日本語記述文法研究会 2008: 285)

¹ 仁田(1995)においては、確かに、各用法間の「繋がり・移り行き(p. 88)」を認めてはいるものの、あくまで「シテ形接続によって表示される意味・用法(p. 88)」を設定した上で二次的に認めている点では日本語記述文法研究会(2008)と同様に、テ形接続の多義を離散的に捉えていると言える。これに対する本発表の考え方は、第3節で詳しく述べる。

² 以下、断りのない場合、強調は松浦による

先行研究による「(A)逆接」「(B)継起」「(C)付帯」の説明

(A)テ形節で表された事態から(通例や常識、慣習として)予想される事態に反する事態が主節で表されたとき、逆接の意味が表現される。

(A') a. 「従属節から引き起こされると予測される事態が起こらず、逆の事態が成立している場合には、逆接の意味を表すことがある」(日本語記述文法研究会2008: 285)

b. 「事象間の関係が順当で自然ではないものの、副次的事象が、必ずしも主たる事象成立の条件をなしてはいない」(仁田1995: 120)

(2) あんな事故にあっ^て助かったのですか。本当に運がいい人だ。(=(1a))

(B)テ形節で表された事態の時間的後に起きた事態が主節で表されたとき、継起の意味が表現される。

(B') a. 「時間の流れに沿って順に生起する複数の事態をつなぐことができる。このような用法を継起という」(日本語記述文法研究会 2008: 283)

b. 「シテ節と主節とが、シテ節で表される事象が先に生起し、主節で表される事象がそれに続いて起こる」(仁田 1995: 90)

(3) デパートに行っ^て、くつを買った。(日本語記述文法研究会 2008: 279)

(C)主節で表された事態と同時に起こり、かつ主節で表された事態の実現のされ方を修飾する事態がテ形節で表されたとき、付帯の意味が表現される。³

(C') a. 「主体が同じで、従属節の事態が主節の事態に付随して成立していることを表す用法を付帯状況という」(日本語記述文法研究会 2008: 286-287)

b. 「シテ節で表されている事象が、主節として表される事象の実現のされ方を限定・修飾する、といったあり方で、主節と結びついている」(仁田 1995: 89)

(4) 胸を張っ^て、堂々と行進した。(日本語記述文法研究会 2008: 279)

(A)(B)(C)に従うと、(5a)は「継起」かつ「逆接」、(5b)は「付帯」かつ「逆接」となる

(5) a. 吉田営業部長は先日「売上 40%増」の目標を掲げ^て、今朝目標の下方修正を指示した。

b. 坂本さんはイヤホンをつけ^てスピーカーから音楽を聴いている。(どちらも作例)

³ 日本語記述文法研究会(2008)では「付帯状況」、仁田(1995)では「付帯状態」と呼ばれる。

3. 理論的道具立て

・言語のダイナミクス :

言語は本質的に動的であり、ヴァリエーションを示すのが常態 (Croft 2003)

(6) a. “[D]iversity (variation) in language is basic. Variation is the normal state of language which we have to deal with.” (Croft 2003: 282)

b. “[A]ll things in grammar must pass. Language is fundamentally dynamic, at both the micro-level—language use— and the macro-level—the broad sweep of grammatical changes that take generations to work themselves out. [...] Synchronic language states are just snapshots of a dynamic process emerging originally from language use in conversational interaction.” (ibid.: 283)

・意味の非還元性 : 意味と形式の組み合わせは一対一に対応しない場合がある

「ユピック・エスキモー語では、その存在物の認識的有り様を示す定性が、名詞が位置づけられる節全体の構造から決まるという特性がある」 (田村 近刊)

(7) a. neqa quimar-tuq. (自動詞構文(INTR=自動詞接辞))

fish.ABS swim-3rd.INTR

「魚が泳いでいる」 'The fish/A fish is swimming.'

b. Caan-am ner-aa neqa (他動詞構文(TRAN=他動詞接辞))

John-ERG eat-TRAN.3s3s fish.ABS

「ジョンはその魚を食べた」 'John ate the fish/*fish.'

c. Caan-aq ner-ruq neq-mek (自動詞構文(ABL.MOD=奪格接辞))

John-ABS eat-3rd.INTR fish-ABL.MOD

「ジョンは魚を食べた」 'John ate *the fish/fish.' (ibid.)

・百科事典的知識とアクセシビリティ (accessibility) :

言語形式が喚起する開放された知識の総体には、アクセスしやすさの差がある

(8) a. “[A] lexical meaning resides in a particular way of accessing an open-ended body of knowledge pertaining to a certain type of entity.” (Langacker 2008: 39)

b. 「語の意味とは、あるモノのタイプに関する解放された知識総体へとアクセスする特定の方法であり、特定のフレーム、進行しつつある文脈の先行発話、選択された理想化認知モデル内にある前提などを通してアクセスされる」 (吉村 2013: 301)

- ・解釈の主体性/客体性：

知覚「する」主体と知覚「される」客体という認知モデル(Langacker 1990)

- (9) “If I take my glasses off, hold them in front of me, and examine them, their construal is maximally objective [...]: they function solely and prominently as the OBJECT OF PERCEPTION [...] By contrast, my construal of the glasses is maximally subjective when I am wearing them and examining another object, so that they fade from my conscious awareness despite their role in determining the nature of my perceptual experience. The glasses then function exclusively as part of the SUBJECT OF PERCEPTION.” (Langacker 1990:316 強調は原文)

- ・アクセシビリティと関係の客体化：アクセシビリティの低さは関係の客体化を引き起こす

- (10) a. メロン——柿——いちご——ぶどう
 b. 梨——バナナ——オレンジ—— 多神教

4. 考察

4.1. テ形に繋がれた事態間の関係の客体化

主張：テ形接続構文から解釈できる「逆接」の意味は、言語に示された事態関係と言語主体の持つ百科事典的知識との不調和によるものである

- (11) a. 和宏は中華料理店に入った。—— 麻婆豆腐を注文した。
 b. 和宏は中華料理店に入った。—— ムール貝のアクアパッツァを注文した。

- ・本発表の主張によって先行研究の問題点は以下のように解決される

言語主体の持つ百科事典的知識には個人差/文化差がある(cf. Bybee 2010: 18–19)。従って、テ形接続構文が「逆接」かつ「継起」または「逆接」かつ「付帯」と解釈されうることは当然である

4.2. 事態関係の多義のネットワーク—テ形接続構文のスキーマ—

提案：次の2点を踏まえて、テ形接続構文のスキーマを提案する(図1)

- ・客観的な事態関係と、言語主体が行う調和/不調和の主観的な判断の両側面で捉えること
- ・言語は本質的に動的であり、ヴァリエーションを示す(=6)ことを指導原理におくこと

・プロトタイプ：カテゴリーは、プロトタイプを中心に形成される

(12) a. Prototype: “That unit in a schematic network which is naturally most salient, most often thought of, most likely to be chosen as representative of that category.” (Langacker 1987: 492)

b. 「カテゴリーはプロトタイプを中心にした内部構造を持ち、帰属において勾配を持った成員が放射状に配列されるモデル(放射状カテゴリー)を描くことができる。[中略]プロトタイプにはカテゴリー全体に共通する属性が最も多く認められる」(吉村 2013: 323)

このとき、テ形接続におけるプロトタイプを、次の属性を全てもつものと仮定する。

<a: successive> 2つの事態が継起的に(i.e. 時間差をもって)起こる

<b: figure/ground> 2つの事態に図地の関係(e.g. 因果関係, 修飾関係)が認められる

<c: harmonious> 2つの事態が起こることは、言語主体の百科事典的知識と調和する

<d: actual> 2つの事態は実際に起きている

<a-d>全ての属性をもつ(13a)をプロトタイプとして、次の(13b-o)はテ形接続構文のスキーマの成員となる(すべて作例)

(13) a. たくさん食べ^て、お腹を壊した。<abcd>

b. 手をあげ^て横断歩道を渡りました。<bcd>

c. 兄は東京にい^て、弟は大阪にいます。<cd>

d. 坂本さんはイヤホンをつけ^てスピーカーから音楽を聴いている。<bd>

e. 塚田さんはいい歳し^て独身だ。<d>

f. あれだけ夜更かしをし^て、次の日はきちんと起きられた。<abd>

g. あの先生は私がどれだけ高く手をあげ^ても、きっと他の人を指名する<ab>

h. 駅前からなら目をつぶっ^ても家に帰れる。

i. 窯業家 坂守味楽齋は、あれだけ見事な壺を焼い^て、全てを自用にのみ使った。<ad>

j. このご恩は死ん^でも忘れません。<a>

k. 朝は郵便局に行っ^て、昼からはスーパーに行った。<acd>

l. 相手の目を見^て話しましょう。<bc>

m. この村では、イノシシが捌けるようになっ^て、ようやく大人と呼ばれる。<abc>

n. 明日は宿題を先に終わらせ^て、遊びに行こう。<ac>

o. このゼミは先生を含め^て8人です。<c>

